如何に〈批〉意見の相異があったか？

２何が〈進〉相異の根本となっているか？

の二面から解決の緒口を把へ、論を進めめたのである。そ

である、伏線和これれば筆者にとって成りは根本問題の一つ

であつてであろうが、として、その思想的基盤をウェービ

ギャッルドの覚我、特に梵の三特性の解離学の中に思想

の萌芽を求めてようとした。この思惟方法は、極めて興味

ある、且つ示唆に富んだものと言へよう。

さて、上述した梵の三特性、即ち有、知、歡喜に依り、梵我、

（即ちGeistigkeit）の中、特に最高存在の規定を知、智性、

（即ちCittamandala）にとらえ、特に梵の三特性の解離学の中に思想

の萌芽を求めて一つ、と仮定する。断くして、著者はこの対立を

各論師の群像を示す。前報に於て論考し、従って凡ての認識

作用は知、智性に始まると論理を押し進め、所で最高存在として

の知、智性に即ち認識作用の根源と

は、然し移り行く、（じつごがれん）と仮定して、筆者はこの

矛盾を解除しようとした。この著者、特に梵の三特性の解離

学に於ての知、智性、即ち認識作用の根源

で、最高存在としての知、智性、即ち認識作用の根源

は、然し移り行く、（じつごがれん）と仮定して、筆者はこの

矛盾を解除しようとした。この著者、特に梵の三特性の解離

学に於ての知、智性、即ち認識作用の根源

で、最高存在としての知、智性、即ち認識作用の根源

は、然し移り行く、（じつごがれん）と仮定して、筆者はこの

矛盾を解除しようとした。この著者、特に梵の三特性の解離

学に於ての知、智性、即ち認識作用の根源

で、最高存在としての知、智性、即ち認識作用の根源

は、然し移り行く、（じつごがれん）と仮定して、筆者はこの

矛盾を解除しようとした。この著者、特に梵の三特性の解離

学に於ての知、智性、即ち認識作用の根源

で、最高存在としての知、智性、即ち認識作用の根源

は、然し移り行く、（じつごがれん）と仮定して、筆者はこの

矛盾を解除しようとした。この著者、特に梵の三特性の解離

学に於ての知、智性、即ち認識作用の根源

で、最高存在としての知、智性、即ち認識作用の根源

は、然し移り行く、（じつごがれん）と仮定して、筆者はこの

矛盾を解除しようとした。この著者、特に梵の三特性の解離

学に於ての知、智性、即ち認識作用の根源

で、最高存在としての知、智性、即ち認識作用の根源

は、然し移り行く、（じつごがれん）と仮定して、筆者はこの

矛盾を解除しようとした。この著者、特に梵の三特性の解離

学に於ての知、智性、即ち認識作用の根源

で、最高存在としての知、智性、即ち認識作用の根源

は、然し移り行く、（じつごがれん）と仮定して、筆者はこの

矛盾を解除しようとした。この著者、特に梵の三特性の解離

学に於ての知、智性、即ち認識作用の根源

で、最高存在としての知、智性、即ち認識作用の根源

は、然し移り行く、（じつごがれん）と仮定して、筆者はこの

矛盾を解除しようとした。この著者、特に梵の三特性の解離

学に於ての知、智性、即ち認識作用の根源

で、最高存在としての知、智性、即ち認識作用の根源

は、然し移り行く、（じつごがれん）と仮定して、筆者はこ

どの主題に於ては、佛教認識論の在り方を示し、先ず大衆部

の虚空仏説を浮び上らせる。そして、仏教についての思想を

述べる。

① 虚空仏説、最高存在＝法身＝清浄心＝無垢心といふ

② 無着のそれによれば、彼が小乗派出身の故に、彌勒の學

説と古い解説仏道学との結合に於てその體系を樹

立したのであり、その限り独自の體系を持たなかった。

= 本論文の根本テーマとしてある。

③ 本論文の三論師の學説に関して著者は次の如く

向け、本論文の根本テーマとしてある。
ような場合、仏教や高僧実在を駆使して、月は心理的仏を引き出し
否が応かに心を同調させ、それが心が次第に成長し、心を
して完全に出来上がることになる。

【注】

1. 言葉の意味は、心の概念を用いる場合、心の概念を用いる場合、心の概念を用いる場合、心の概念を用いる場合、心の概念を用いる場合、心の概念を用いる場合、心の概念を用いる場合、心の概念を用いる場合、心の概念を用いる場合、心の概念を用いる場合、心の概念を用いる場合、心の概念を用いる場合、心の概念を用いる場合、心の概念を用いる場合、心の概念を用いる場合。
心的な意味をもたねばならなかった。このことから、我々はその価値をどのように評価するかを問題とする。我々の探究を始めよう。

（雲井）

（二）

瑜伽行派の学説の批評に際して、我々はその価値をどのように評価するかを問題とする。我々の探究を始めよう。
苦しめられない故に、「
ありものに善く、それ以上に全く決定的な特性が最高存在に帰
在するもの」(Buddhanature) は凡ゆる存在に渇染し、しかも煩悩
によって渇染されない。彼も全世界が虚空によって支えられ
て立ち、そしてその中へ消え去る如く、それと同
じく凡ゆる生命力はかの無漏界(Samantavya dhatus)に
支へられて存立し、又そこへ消滅しつくる。

そして因果と原因の和合、総体(śāntāgati、も消滅(減)
不変異である。清浄の如くに清浄心は不変にして明るる輝
よって渇染されない。彼も全世界が虚空によって支えられ
て立ち、そしてその中へ消え去る如く、それと同
じく凡ゆる生命力はかの無漏界(Samantavya dhatus)に
支へられて存立し、又そこへ消滅しつくる。

そして因果と原因の和合、総体(śāntāgati、も消滅(減)
不変異である。清浄の如くに清浄心は不変にして明るる輝
よって渇染されない。彼も全世界が虚空によって支えられ
て立ち、そしてその中へ消え去る如く、それと同
じく凡ゆる生命力はかの無漏界(Samantavya dhatus)に
支へられて存立し、又そこへ消滅しつくる。

そして因果と原因の和合、総体(śāntāgati、も消滅(減)
不変異である。清浄の如くに清浄心は不変にして明るる輝
よって渇染されない。彼も全世界が虚空によって支えられ
て立ち、そしてその中へ消え去る如く、それと同
じく凡ゆる生命力はかの無漏界(Samantavya dhatus)に
支へられて存立し、又そこへ消滅しつくる。

そして因果と原因の和合、総体(śāntāgati、も消滅(減)
不変異である。清浄の如くに清浄心は不変にして明るる輝
よって渇染されない。彼も全世界が虚空によって支えられ
て立ち、そしてその中へ消え去る如く、それと同
じく凡ゆる生命力はかの無漏界(Samantavya dhatus)に
支へられて存立し、又そこへ消滅しつくる。
遍分別論の第一章に於てこのことが言へ。然し、それ
は附加物に止まっておる。言はと組織體系化が誤まって
来たのであり、概念と表現の方法は独自のものであって
慣習ではない。例へば、後期瑜伽行學派の特質的な術
語である阿頴耶識の名稱は、彼の場合未だ絶對的なもの
でない、とふふが特徴づけられる。これは、かの無着といふ偉
大な門弟の先づ以て功績と言はねばならぬ。吾々は、今
から彼に注意しようと思う。

既に述べた所、無着は小乗の哲學的理論界を組織的
化する為、彼は小乘行派組織へ導入し、且、その欲界に適應させた。

阿頴耶識、即ち、わが心理的なる出离事の根本を成し、それ
は又小乗派とも同じように、認識作用に附随する凡ゆる
心理的なる法、即ち、心・心所法の詳細なるリストを作成し
た。且、それを基礎として彼は心理學を樹立し、同時に
凡ゆる心理的なる諸経過を闡明したのである。この場合、
彼の方法が即在で居たが故に、彌勒主に比べて鋭い大乗
学のことをなのである。

小乗は、その煩煩哲學に於て、全く決定的な思辯形式
で最高に発展した僧侶哲學を精査した。所でこの優れ
た体系は、若し人が、自分自身の確定たる哲學的原理な
くしてその体系をもにしようと試みる時、この体系は
そのような人を無理に此の体系の事に於てひきづり
と、且、その形に何等不思議ではない。若しそうでなければ、
人は、先づ自身で新しい自己本来の思考の可能性を考へ
出せばならなかったであろう。然し、このことは無
法の出でたから……。然し、この小乗煩煩哲學は、心
識的諸経過をと自古から焦く心法の遊戯として認識し
た。堅慧の考へでは、彼れ（無着）の体系中には、最高